モ入給ハズ、互ニ目ヲ見合テ、タヾ涙ヲノミゾ流シ給ケル、夜ニ入ケレ共、裝束モクツロゲズ、袖片敷テ臥給ヘリ、曉方ニ板敷ノキシリ〳〵ト鳴ケレバ、預ノ兵奇テ、幕ノ隙ヨリ是ヲ見レバ、内大臣〇平宗盛子息ノ右衞門督〇清宗ヲ搔寄テ、淨衣ノ袖ヲ打キセ給ケリ、右衞門督ハ今年十七歳也、寒サヲ勞給ハントテ也、熊井太郎、江田源三ナド云者共是ヲ見テ、穴糸惜ヤアレ見給ヘ殿原、恩愛ノ慈悲バカリ、無慙ノ事ハアラジ、アノ身トシテ單ヘナル袖ヲ打キセ給タラバ、イカ計ノ寒ヲ禦ベキゾヤ、責テノ志カナトテ、猛キモノヽフナレ共、皆袖ヲ絞ケリ、

〔十六夜日記〕むかしかべのなかより、もとめいでたりけんふみ〇孝經の名は、今の世の人の子は、夢ばかりも身のうへのことゝは、しらざりけりな、みづぐきのをかのくずは、かへす〳〵もかきをくあとたしかなれども、かひなきものは、おやのいさめなりけり、〇中略道〇和歌をたすけよ、こをはぐゝめ、のちの世をとへとて、ふかき契りをむすびをかれし、ほそ川のながれも、ゆへなくせきとどめられしかば、跡とふのりのともし火も、道をまもり家をたすけむおやこの命も、もろともにきえをあらそふとし月をへて、あやうく心ぼそきながら、なにとしてつれなくけふまでは、ながらふらん、おしからぬ身ひとつは、やすく思ひすつれども、子を思ふ心のやみは、なをしのびがたく、道をかへりみる恨は、やらんかたなく、さても猶あづまのかめの鏡にうつさむは、くもらぬかげもやあらはるゝと、せめて思ひあまりて、よろづのはゞかりをわすれ、身をようなき物になしはてゝ、ゆくりもなく、いざよふ月にさそはれいでなんとぞ思ひなりぬる、

〔東見記下〕阿佛ハ平時忠ノ一門ノ女也、安嘉門院ノ衞門佐ト云、後ニハ四條トモ云、嫁爲家而生爲相、爲氏ハ宇津宮彌三郎賴綱ノ女之腹也、爲氏ハ兄也、爲家末後、播磨ノ越部ノ庄ヲ爲相ニ讓ル、爲相幼少ノ故ニ、爲氏是ヲ押領ス、於是阿佛鎌倉ヘ下リ是ヲ訴フ、此時爲氏是ヲ爲相ニカヘス、